

■演題6 噴門部近傍胃粘膜下腫瘍に施行した単孔式LECSの1例

代表演者：出村公一 先生（ベルランド総合病院 外科）

共同演者：[ベルランド総合病院 外科] 奥村哲 革島洋志 豊田翔 山本堪介 伊藤文 水村直人
今川敦夫 大場一輝 小川雅生 川崎誠康 亀山雅男
[ベルランド総合病院 消化器内科] 多田和弘 伯耆徳之 安辰一

LECSは内腔突出型の胃粘膜下腫瘍に対して、切除範囲の縮小を図るために非常に有用な手技である。当院ではリニアステープラでの楔状切除でも変形を生じないような部位では内視鏡確認下にリニアステープラでの切除を行い、噴門に近い場所や変形をきたすような場合ではLECSにて切除を行い、手縫い縫合にて閉鎖を行っている。これまで10例に対してこのような手技を行ってきた。腹腔鏡手術に関してもさらなる低侵襲化、整容性の向上を狙い単孔式手術を取り入れている。今回腹壁切開の縮小も目指し、単孔式LECSを行った症例を報告する。

症例は71歳女性。胃穹隆部前壁噴門近傍に30mmの内腔突出型のGISTを認めた。

臍2.5cmシグザグ切開にて開腹し、単孔用プラットフォームを用い3ポートにて手術を開始した。内視鏡にて腫瘍の位置を確認しつつ腫瘍辺縁から頭側、右側、左側に約10mm離れた胃壁を体外から直接刺入した糸針にて吊り上げた。その後内視鏡下にITナイフを用い粘膜切除→全層切除を行い、部分的には腹腔鏡下にも切除を行い、回収袋に収納し経済的に摘出した。その後Vlocを用い全層+漿膜筋層連続縫合閉鎖を行った。手術時間118分、出血は少量であった。腫瘍位置によっては単孔式LECSも可能と思われた。